

シンクロナイズドスイミングにおけるフリールーティンの分析
～2012 年ロンドンオリンピックチームフリールーティンの
演技構成の得点と演技内容の関係性について～

Analysis of the components of Free routines in Synchronized Swimming.
～Relationship between Choreography score and Performance contents at London Olympic
Games in 2012～

1K09B043

指導教員 主査 奥野景介 先生

小野 茜

副査 矢内利政 先生

【目的】

シンクロナイズドスイミングにおけるフリールーティン演技の採点はテクニカルメリット（完遂度・同時性・難易度）とアーティスティックインプレッション（構成・音楽の解釈・プレゼンテーション）の 2 つの観点から評価される。採点は、審判員がジャッジの手引きに記載されている 1 点刻みのスコアレンジの採点基準をもとに、10 点満点で行われる。しかし、現行の採点基準は抽象的で具体性に欠けるため、審判員の経験や感性によって採点にばらつきが生じやすい。そこで、ジャッジの手引きに記載された、採点基準の抽象的な表現がどのような演技を示しているのか、具体的に説明することが出来ればジャッジの経験による点数のばらつきが減り、競技者側も目指すべき演技がより明確になると考えた。

したがって、本研究ではロンドンオリンピック出場チームを対象に、フリールーティンの上位と下位の演技構成を分析し比較することで、構成の『完璧 10 点』の採点基準を具体化することを目的とした。そして「上位チームは下位チームより、パターン数とラップ数が多く、コンビネーション動作の動作時間が長い」という仮説を立て、これらの観点から分析・考察を行うこととした。

【方法】

分析対象チームは、2012 年ロンドンオリンピック・チームフリールーティンに出場した全 8 チームの中から、上位 3 チーム（1 位ロシア、2 位中国、3 位スペイン）と下位 3 チーム（6 位イギリス、7 位エジプト、8 位オーストラリア）とした。

分析映像は、日本国内の地上デジタル放送でテレビ放映された映像を録画したものを使用した。

分析方法は、フリールーティン演技を藤島ら（2012）による分類法をもとに構成要素の動作別分類をし、動作別構成要素の時系列配置、動作別時間、パターン数、ラップ数を算出した。構成要素の動作別分類は、まず「陸上動作」と「プール内」で演技する動作に大きく分け、腕を主体とした上体による表現動作を「ストローク」とし、すべての脚動作を「フィギュア」とした。「ストローク」と「フィギュア」が同時に行われている場面を「コンビネーション」とした。演技中に泳者同士でアシストして水上に出たものを「リフト」とし、その他の場面を「水中」とした。パターンは水中で変化したものを「水中」とし、ストローク中とフィギュア中に変化した

たものを「その他」と分類した。

【結果】

動作別構成要素の時系列配置では、開始動作は上位チームに共通点が見られたが、終了動作に上位と下位の間に差は見られなかった。

動作別の平均時間と各動作別平均時間の全演技時間に対する割合では、上位チームと下位チームの間にストロークと水中に差が見られたが、どちらも標準偏差値が高いことや大きな相違が見られないことから、差は認められなかった。

パターン数の合計回数の平均と割合では、上位チームは下位チームよりパターン数が多く、ともに水中でのパターン変化よりその他でのパターン変化が多いことが分かった。

ラップ数は、すべてのチームが 3.5 ラップであった。

【考察】

上位チーム・下位チームごとの各動作時間の割合に差は認められなかったことから、コンビネーション動作の動作時間が長いという仮説は当てはまらなかった。その他の各動作時間の割合や動作別構成要素の時系列配置からも差が認められなかったことから、構成の『完璧 10 点』の採点基準の表現は、動作をどのくらいやっているのか（動作時間）、どこに入れるのか（配置）ではなく、動作をどのようにやっているか、創造性や多様性といった質的な部分、および技や動作の複雑さや難易度の優劣によるものではないかと考えられる。したがって、創造性や多様性、複雑さや難易度の違いを検証する必要がある。

パターン数は、下位チームより上位チームのほうが多いことから、パターン数が多いほど高度であり、ストローク中とフィギュア中のパターン数が多いほどより高度であることが明らかとなった。

ラップ数はすべてのチームが 3.5 ラップであったことから、ラップ数が多いという仮説は当てはまらなかった。

結論として、構成の『完璧 10 点』の採点基準を具体化することに対し、本研究で明らかとなった結果は「完璧 10 点の演技構成はよりパターン数が多い」ということである。演技構成においてパターン数以外の差が見られなかったことから、現行の採点基準を具体化するためには、創造性や多様性、複雑さや難易度の違いなどの「質的相違」について分析を進めていくことが課題である。